

2019年5月28日

第11回(2018年)「昭和女子大学女性文化研究賞」選考報告

昭和女子大学女性文化研究賞選考委員会

1. 選考経過

2018年に発行された著作を対象とする第11回「昭和女子大学女性文化研究賞」の選考対象は、自薦・他薦を含む単著と共著29点であった。

第1次選考は、2回に亘る(2月7日、3月6日)学内選考委員会によって行われ、第1次選考基準に沿って候補作として次の単著2点を選んだ(発行月順)。

石井香江『電話交換手はなぜ「女の仕事」になったのか—技術とジェンダーの日独比較社会史—』  
(ミネルヴァ書房 2018年5月)

伊藤セツ『山川菊栄研究—過去を読み 未来を拓く—』  
(ドメス出版 2018年11月)

これら2点についての第2次(最終)選考は、4月11日に学外選考委員の元東京大学副学長 大沢真理氏の出席の下、女性文化研究賞選考委員会で行われた。もうお一方の学外選考委員である内閣府男女共同参画局長 池永肇恵氏は公務のため欠席され、「所見」を提出された。

検討の結果、候補作2点のうち、19世紀後半から両大戦間期の日本とドイツを対象に、電話交換手は「女の仕事」、電信技手は「男の仕事」へとジェンダー化される「性別職務分離」の歴史的形成過程を、職場と当事者に関わる膨大な第1次史資料を渉猟し、多角的な文脈からそのメカニズムを考察した石井香江『電話交換手はなぜ「女の仕事」になったのか—技術とジェンダーの日独比較社会史—』に、第11回「昭和女子大学女性文化研究賞」を贈呈することを決定した。

\*参考：第1次選考基準(2008年度、第1回本賞選考時に、選考の目安として確認された)

- 1)単著を優先する。
- 2)テーマが「女性文化研究賞」の趣旨に合い、明確かつ有意義である。
- 3)研究方法、分析視角が優れている。
- 4)著作の独創性と体系性。
- 5)結論、提言の明瞭さ。
- 6)叙述の成熟性

2. 選考結果

第11回(2018年)「昭和女子大学女性文化研究賞」受賞作

石井香江『電話交換手はなぜ「女の仕事」になったのか—技術とジェンダーの日独比較社会史—』  
(ミネルヴァ書房 2018年5月)

3. 受賞作の選考理由

著者の石井香江氏は、現在、同志社大学グローバル地域文化学部准教授である。同志社大学の教員プロフィールによれば、ベルリン・フンボルト大学 社会科学主専攻を卒業後、一

橋大学及び同大学院に進学されている。本書は、石井氏が 2006 年に博士号を取得された博士論文「〈電話交換手／電信技手〉の歴史社会学—近代日独の情報通信技術とジェンダー」に大幅な加筆・修正を加えたものである。

本書の受賞理由は、「電信・電話のジェンダー化」という固有の概念を用いて、特定の技術と特定の性別とが結びつく「性別職務分離」の技術的・社会的・文化的メカニズムを初めて読み解いたことである。電信・電話職場の日常的実践や当事者の言説に関わる様々な史資料を徹底的に渉猟し丹念に考察する作業を通じて、高い独自性を示している点が評価された。

著者自ら「本書で筆者はあたかも考古学者のように、地中深くまで掘り起こし、一部しか見せない断片の全体像に近づこうと試みた」と述べているように、この意欲的な営みから、「電信・電話のジェンダー化」には、経営側の人事・管理政策のみならず、電信・電話技術それ自体のジェンダー性、ジェンダー規範を帯びた技術・技能がもたらす職場文化、さらに職場の主體的アクターとしての電信技手・電話交換手の日常的実践や言説が繰り広げるジェンダー・ポリティクスなど複数の諸契機が複雑に絡み合っている様が描きだされている。

本書の詳細は、後の受賞記念講演に譲り、著者が明らかにした興味深い知見の一端に触れたい。

本書のキー概念をなす「電信・電話のジェンダー化」を、著者は「電信・電話という技術それ自体、またこれらの技術を用いた仕事が、性別を軸に差異化される現象を指し、これは職場におけるジェンダー秩序のあり方にも大きく影響している」と定義づけている。

19 世紀半ばから世紀転換期を対象とした「第 I 部『男の仕事／女の仕事』の誕生」では、「電信・電話のジェンダー化」への技術革新のインパクトに着目する。通信事業における「性別職務分離」の技術的契機は、1880 年代に、電信に次ぐ新たな情報通信技術として登場した電話である。特に創業期の単式交換機から複式交換機への転換は、労務管理とコスト軽減を図る通信部の人事政策に大きな影響を与えた。単式では他の交換手と協業するために大声を出したり走り回る必要があったが、複式交換機では一人の交換手が椅子に座ったままで業務を完了できることが、電話交換業務への女性の導入を促進した。これに呼応して電話職場では、女性の「声」や女性特有の「感情のコントロール」、「細やかな配慮」が電話サービスに適した女性の「特性」として喧伝され、男性中級・下級官吏に代わって「高い声と教養を有した女性」が電話交換業務に大量に配置された。

片や、電信の「男性化」は、ドイツでは、退役軍人である文民官吏候補軍人を優先的に雇用する国家の優遇措置によって維持された。政府の施策は、筆記が遅い軍人のためにモールス電信機に代わって印刷電信機を導入することにまで及んだ。本来、軍用として発展した電信は、電信と軍事、その担い手たる男性と密接な関係を取り結び、「軍隊における男性同盟的なハビトゥス」と電信業務における男性技手同士の協力の親和性が指摘された。

世紀転換期から両大戦間期を扱った「第 II 部」では、これまでの研究史では検討されてこなかった女性の職能組織、ドイツ帝国女性郵便・電信官吏同盟（1912 年設立）と、他方、日本では『通信協会雑誌』に登場した「女性の声」欄（1926 年）に着目している。そこに表われた女性たちの具体的な言説、実践、表象をめぐる攻防を社会的・文化的文脈のなかで読み解き、職務のジェンダー化の根底に横たわる女性たちの性規範やアイデンティティに見られるジレンマやポリティクスを描き出している。

一例を挙げれば、先進的かつ近代的な側面を有する「ドイツ帝国女性郵便・電信官吏同盟」は、「独身義務条項」の廃止を要求する傍らで、女性官吏にふさわしい「風紀と道徳」を擁護するために「未婚の母の解雇と不採用」を強く求めた。他方、日本では、新しい女性像としての「職業婦人」や「モダンガール」への渴望が「女性の声」欄で吐露される半面で、電話局内に創設された「賢母良妻」になるための女学校が、家族主義を模したパターンリスティックな労使関係とともに、女性たちの仕事・家族・女性観やセクシュアリティに対する思考に大きな影響を与えていた。

「第Ⅲ部 職業病とジェンダー」では、日本の電信職場に形成された「モールス文化」を考察した「第 6 章」が、「電信・電話のジェンダー化」の文脈から興味深い。第一次大戦以降、電信業務でも相当数の女性電信技手が働いていたが、男性がモールス符号を打って送受信するモールス電信機を操作したのに対し、女性は、文字を読んで口送し、相手の伝言を聞いて手書きやタイプライターで記録する電話託送へと差異化され、職場も分離されていた。

男性職場では、日常的に、モールス通信の「技能」をめぐる激しい競い合い、通称「机上論争」が展開され、「電信道」、「タタキヤ気質」と呼ばれる「職人氣質」が、男性電信技手のアイデンティティ形成に大きな役割を及ぼしていた。この「モールス文化」と形容される独自の職場文化の醸成は、電信の「男性イメージ」を活性化し、電信職場の「性別職務分離」と「電信・電話のジェンダー化」を一層強化した。

以上のように、電信技手と電話交換手の労働と生活を、史資料をして生き活きと語らしめた本書は一般の読者にも魅力的であろう。選考委員会でのコメントとして、比較社会史の観点から、日本とドイツの「電信・電話の性別職務分離」の共通性と特異性が納得的に説明されたかという点には、今後一層の研鑽が期待されるという意見があったことを申し述べておきたい。

最後に、今回、受賞の選から漏れたもう一つの候補作『山川菊栄研究 ―過去を読み 未来を拓く―』については、著者の研究スタンスから研究史に山川菊栄を位置付けようとする、学究的意欲がほとぼしる労作と評価されたが、著者自身が、本書は「まだ練られていない不十分な点を残している」と述べているように、「山川菊栄研究」の途上にある。研究の頂へのさらなる進展を選考委員一同期待している。